

ヘルパンギーナが流行の兆しを見せています。

国立感染症研究所感染症疫学センターによると、東京都や神奈川県、埼玉県の一部で警報基準値(定点医療機関あたり6人)を超える数となっています。愛知県でも6/24~6/30の期間に92人だった感染者数が7/1~7/7には176人と増加しています(愛知県感染症情報センター調べ)。

ヘルパンギーナとは口にできる特有の小水疱と発熱を主症状とする夏かぜの一種です。口内に水泡や水ぶくれ、口蓋垂(のどちんこの事です)に炎症症状が確認されるようになるため食べ物を摂取する際に喉に強い痛みを伴うケースが大半です。潜伏期は2~4日、初夏から秋にかけて増加し、特に乳幼児に多く発症します。症状としては突然の38~40℃の発熱が1~3日間続き、全身倦怠感、食欲不振、咽頭痛、嘔吐、四肢痛などがある場合もあります。

ヘルパンギーナはウイルスによる病気ですが、有効なワクチンがなく予防接種は行われていません。そこで治療は症状に対する対症療法が中心になります。家庭では高熱を発症しやすい事からまずは安静に過ごすこと。そして、高熱に伴う脱水症状を防止するために水分補給をしっかりと行うことが大切です。

最後に感染予防についてですが、ウイルスを含んだ唾液などがくしゃみや咳で広がる飛沫感染が中心なので、一番の予防法は、ヘルパンギーナに感染している子供との接触を避けることです。後は、うがいや手洗い、手指の消毒を行うことが有効です。便からウイルスが出ているので、手洗いは十分しましょう

